

第9回「泉大津市オリアム随筆賞」

【優秀賞】

虹色の座布団

中村実千代・栃木県小山市

苦学してやっと教員になった私に、母は二枚の座布団を作ってくれた。

「職員室と教室の両方で使うように……」

買物帰りに立ち寄った実家の座敷で、母がそう言いながら出してくれた二枚の座布団は、毛糸で編んだ縞模様のカバーに包まれていた。

「椅子に直接座ると冷えるからね、からだを冷やしてはいけないよ」

カバーの模様は幅一センチくらいの横縞で、様々な色の毛糸で編みこみである。

「ほんとうは新しい毛糸で編んでやりたかったんだけど、残り毛糸が少しずつあったから組み合わせてみたよ」

手に取って見ると、母の言う通り、古い毛糸を工夫して組み合わせ、まるで、くすんだ虹のような模様になっている。

「虹みたいだね」

「虹？ 虹はもっと華やかな色だよ」

「そんなことないよ、綺麗だわ。お母さん、お祝いに作ってくれたんでしょう？」

「お前が頑張って先生になったから、何かお祝いをしてやりたくってね」

母はそう言うのとふっと目を伏せた。

町の中心地で時計店を開いていた両親は、だんだんと傾いていく商売を立て直す術もなく、貧しさに喘ぐようになった。私が高校へ進学する頃は、二つ違いの兄と私の学費が重なることになり、いちばん苦しいときだった。

勉強好きな私は大学へ進学しなかった。だが、苦しい家計を考えたら、それは到底叶わぬ夢。高校を出たら就職、と決まっているようなものだから、行きたかった進学校は諦めて、就職に有利な学校を受験することにした。

受験前に、母と一緒にその高校を見学に行った。木洩れ日にゆらゆら照らされた母の後ろ姿が淋し気なので、おもわず「お母さん」と声を掛けたら、  
「実っちゃん、Aさんに大学へ行かせてもらったらどうかね」

と声を立て、真剣な眼で見つめてきた。母は義兄の名を呼んで、その人の手を借りて進学することを勧めているのだ。私は無言で母を追い抜き校門を出た。

高校を出て働いていた職場で夫と知り合い結婚し、義父の勧めで通信教育制の大学で学んだ。二年目に教員採用試験を受け合格して、念願の教員になることができた。

母は目を潤ませて喜び、「えらい、えらい」を連発した。婚家の世話で教員になった娘を不憫に思い、親としての不甲斐なさを詫びているような、くちやくちやな泣き顔だった。

初めて赴任した学校で、持ってきた荷物の中から一番最初に取り出したのは、母の作ってくれた「虹色の座布団」。

職員室の椅子に載せて掌で撫でてみると、隣の同僚がそれに気づいた。

「へえ、手作りのお座布団？」

「母が教員になった祝いに編んでくれました」

私得意そうに言うと、彼女は目を丸くしてもう一度座布団を眺め、小さく手を叩いた。

「おめでとう！ お母さんの愛情いっぱいね」

「おめでたいので、模様は虹なんですよ」

「そうか、虹色の夢を持ち続けて努力したから、お母さんがご褒美をくださったのね」

冬の寒い夕暮れ、子供たちが帰った教室で一人仕事をしていると、椅子に座ったお尻に母の座布団の温かみが皮膚を通して伝わってくる。先輩たちの厳しい指導に疲れ果てて職員室へ戻ると、もう一枚の座布団がやさしくからだを温め慰めてくれた。

母は、職員室に一枚、教室に一枚と、娘が座る場面を想像しながら、一目一目に愛を込めて座布団カバーを編んでくれたのだ。

ある日、仕事中にからだの具合が悪くなった。

やっと子供たちを帰した教室で、辛くて涙がこぼれた。私は虹色の座布団を机に敷いてその上に頭を載せ、母を想って座布団を抱き締めた。

幼い頃に母に抱かれ頬ずりされたこと、娘時代に喧嘩をしたこと、結婚式のとき母の顔が淋し気だったこと、色んな思い出が、走馬灯のように弱った心をよぎっていく。

母にすれば、念願叶って教職に就いた娘に、もっと高価な祝い品を贈りたかったことだろう。だが、母には自由になる金銭はもう無かった。だから、古いセーターを解した毛糸を集め、せめて、娘のからだだけは守ってやろうと、せっせと編み棒を動かした。

あれからもう四十数年が経つ。

「虹色の座布団」が有ったからこそ頑張れた教職の日々も無事終了し、この頃は亡き母のことばかり思い出す。

座敷にポツンと座って下を向き編み棒を動かす母の横顔は、どこか儚げで、縋りつきたいくらい懐かしい。